

『人権と部落問題』 2017年2月増刊号のご紹介

2月増刊号「はじめにー生きざまから生きぶりへー」より転載

■はじめに — 生きざまから生きぶりへ —

三人の作家 — 中上健次と大塚茂樹と住井すゑ

16年11月26日（12月2日再放送）、あの慎重なNHKが被差別部落をタイトルに出し、特定の地域（和歌山県新宮市春日町）とそこに生きる人びとを一時間にわたって放映した（「路地の声 父の声」中上健次を探して）。Eテレ。私は中上を全く評価しないが、部落問題の解決過程を物語るひと時だった。

塩田純プロデューサーは「女郎として売られ、14歳で私生児を産んだというような過酷な身の上話と、その中でも助け合って生きる豊かな共同性が記録されている」と、その部落に生まれた芥川賞作家が36年前に聞き取りしたカセットテープを評価した（朝日新聞11月21日「フォーカスオン」）。

私はこの現実を「生きざま」ととらえ、その事実を語り、出来れば文章にし記録する作業をおして「生きぶり」に高めたいと、「部落民の手記」の運動を提唱した。その一端が『わたしやそれでも生きてきた』（65年／部落問題研究所）だ。だが生きぶりにまで高めるためには数十年にわたる取り組み（解決過程）が必要だった。

半年前の16年6月5日、その過程と事実を明晰に書き上げたノンフィクション作家大塚茂樹の『原爆にも部落差別にも負けなかった人びと—広島・小さな町の戦後史』が京都のかがわ出版から、刊行された。

東京新聞の特報欄（07月17日）で大塚は「戦後社会の悲しみ、苦しみが煮詰められた町だった。被爆や差別と闘い、町をよりよく変えようと、政治、宗教を越えて努力し、手を取り合い、差別の根源を克服してきた」と話し、「この本のように地域名、個人名、顔写真が載った被差別部落の戦後史はほとんどない」と語っている。

部落の地名が判明するではないかと、全国的な糾弾が展開された「全国地名総鑑」。人名が特定されるからと公簿を封印させた「壬申戸籍」の糾弾。官民を恐怖に陥れたあの出来事は、いつのことだったのか。

部落の地名・人名が市販された書物の上で明記されたことは、「ほとんどない」のではなく、皆無なのだ。これは部落問題史で言えば革命的なできごとだ。部落問題の解決過程はここまで来ている、実証と言っていざらう。

住井すゑは勤評闘争中の部落（和歌山県朝来・大谷）で一週間寝食を共にして、『橋のない川』の執筆を決意した。春日町にも広島市の福島町にも何回も足を運んで、60年代の（部落問題解決過程の）高揚を体得している。水戸運動に設定しているが、誠太郎・幸二の生きぶりは解決過程を表象するものだと私は考えている。だから、あれだけの読者を獲得できたし、今井 正の映画「橋のない川」は全国の山間地まで上映運動が展開された。

今は鬼籍の人となった先達の、その仕事と人柄を、ともに取り組んだ筆者にさぐってもらった。それは、その人の生き方、すなわち生きぶりに示される部落問題解決段階の確認でもある。

部落解放運動

大塚が言う「差別の根源」とたたかったのは、部落解放運動の父とまで言われた松本治一郎（執筆・成澤榮壽）だ。天皇制を直接に衝くところまではいかなかったが、天皇制の支えであった貴族院が民主化された参議院の副議長として、天皇を神としてあがめることを拒否。皇室会議のメンバーとして、皇室のあり方に苦言を呈した。

だが戦後の部落の生活現実、国民のそれに倍して悲惨だった。その部落の多くの陋屋に「解放令」を出した明治天皇の「御真影」が飾られていたことを私は知っている。日本社会を覆す起爆剤になりかねない部落問題を、世に知らしめたのが米騒動だったが、権力は融和政策で対応した。それが「御真影」であり、戦後は身分社会を具現し部落支配の構成要素でもあった「世間」が崩壊していくなかで、部落ボスを使った同和行政で対応した。

松本はこの難しい部落解放運動の象徴であった。

難しいといったのは、日本社会の「あり方」にかかわりながら悲惨な部落の生活を向上させるためには、行政に頼らざるを得ないという課題だ。部落解放運動と同和行政が「解決過程」を「共有」する道の解明に体当たりしたのが北原泰作（執筆・丹波正史）である。

部落差別の撤廃を天皇に直訴した北原が、戦後は部落解放委員会の全国書記長を担い、政府の同和対策審議会の委員として国民融合論を提起するまでの運動家・理論家の歩みは悲壮であり見事である。

部落解放運動の本当の難しさは、住民運動としての「現場」にあった。水平社運動は差別糾弾の闘いを、生活の向上に結びつける「部落民委員会活動」（のちに「部落委員会活動」として示したが、戦時体制に埋没する。それを継承しようと戦後いち早く（水平社運動と融和運動家が大団結して）部落解放全国委員会を生み出すが「部落解放の精鋭グループ」という組織は、松本の追放反対運動を打ち上げてしまっただけで済まなかった。

オールロマンス事件は解放運動として、行政をやっつける或いは転換させる戦術（行政闘争）を手に入れたが、それ又、行政権力が運動を懐柔する手段ともなった。運動と行政が解放過程を「共有」することの難しさは国政段階だけでなく、運動の第一線である現場にこそあったのだ。

差別糾弾と生活の向上と解放意欲を高める取り組みを大衆的に進めるべく、解放委を解放同盟に発展させた53年から55年の経緯は重要だ。その実質的な推進者であった三木一平（解放委全国常任委員、執筆・東上高志）や中西義雄（解放委中央本部書記、執筆・丹波正史）と「河原町七条角」の研究所で同居していた研究所に入りたての私は二人から多くを学ぶことが出来た。だが住民運動として闘われることの重要性は理解できなかった。

住民運動は、性・年齢・資産・宗教・思想の別を問わない地域住民の要求実現のための大衆組織が原則である。部落解放運動は基本的には住民運動であるが、この原則を逸脱する時何が起こるか。それが権力の介入であり、組織の腐敗だろう。

防衛庁長官の後、大阪府知事になった左藤義詮が「二百億や三百億で解同を抱き込むことが出来れば安いのもだ」とした大阪府の矢田事件以後の不正常。警察官僚が牛耳る兵庫県政が八鹿高校事件の影武者だったことは誰

も否定出来ないだろう。とりわけ勤評闘争の和歌山県では教組も押した知事を自民党に入党させ、公費を使って部落解放運動を分裂させることまでした。その顕著な例が住井が生涯の仕事を決意した朝来だ。「国策会社」に擬した京都市行政の（朝田社長の）京都製靴が、朝田が起こした文化厚生会館事件の側面でもあった。松本が亡くなり、あとを継いだ解同第二代委員長朝田善之助のいわゆる「朝田理論」が全国に荒れ狂った「逆流」は、権力との「合作」だった。

その中で住民運動の原則を守り、全国的に部落解放運動を進展させたのは岡山県の解放運動と委員長の岡映（執筆・中島純男）だ。特色は農民運動との連帯、すなわち県民的な住民運動を進展させたことだ。その典型的な地域として市民との対話集会を重ねた津山市をあげることができている（91年『津山からのレポート』部落問題研究所）、こうした岡山の戦後の運動が正常化連・全解連を支え、部落解放運動を守り抜く砦になった。

その全国的な苦闘を背負ったのが中西義雄である。苦闘と書いたものの内容は馬原鉄男（執筆・井手幸喜）『部落解放運動の70年』（92年／新日本新書）に要領よくまとめられている。一部だけ引用する。

「一九六九（昭和44）年七月一〇日、同和対策事業特別措置法が施行され、特別措置法を基礎に本格的な同和事業が展開されることになった。解同はこの同特法の施行に伴う同和事業の排他的独占をねらって、『窓口一本化』政策をいちだんと強め、組織内の批判派を排除しながら、他方では自治体にたいする暴力的糾弾を重ねていた。」

実際のそれは、行政の担当者を罵詈雑言で責めたて、生徒が教師を徹夜で糾弾するという、兵庫県但馬の部落の指導者が「この世の生き地獄」と嘆いた（新しい）「生きざま」を産んでいた。そうした「奔流」を「正常化」することの困難は筆舌に尽くしがたい。解同からは敵視され、行政からは孤立させられるなかで70年に結成された「部落解放同盟正常化全国連絡会議」（正常化連）が、76年に全国部落解放運動連合会（全解連）に発展するまでの6年間は新しい段階での「生きざり」創造の坩堝だった。その議長・委員長が岡であり、事務局長・書記長として日常を背負ったのが中西だった。

私は衆参両院の同和特別小委員会でも中西が述べた、「部落問題解決の最終責任は部落と運動の側にあります」という発言を忘れることは出来ない。

協同の取り組み

協同の取り組みを象徴しているのは、部落問題研究所だ。48年に設立された研究所は歴史上初めて、部落内外の協同によって、諸科学の協同によって、研究と運動と教育・啓発の協同によって「部落問題のすみやかな解決に資する」（「定款」）取り組みを実現していった。これは、兵庫部落問題研究所や東京部落問題研究会にも共通している。

内外というのは水平社運動の木村京太郎（執筆・東上高志）、部落解放運動の三木一平、研究者の藤谷俊雄（執筆・東上高志）とともに初代理事長の奈良本辰也や「部落史」の提唱者林屋辰三郎や研究所に「集いし人びと」（東上高志の連載「部落問題研究所70年の面影」）を指している。私は部落問題解決過程を担う「新しい当事者」の登場として評価した。これが研究と運動と教育・啓発の協同を生み出す。

諸科学の協同は歴史学、教育学を双壁に社会学・文化人類学・経済学・法学・建築学・医学そして文芸研究にまで及んでいる。

研究所の創立には別の共同もあった。京都市行政である。その中心は中川忠次だったが、その後の行政と解同が癒着するなかで起こされたのが文化厚生会館事件だった。『部落問題研究所の三十年』（79年／部落問題研究所）に詳しく書かれているから繰り返さないが、それとの取り組みが研究所を大衆的・民主的・科学的なそれに発展させたことだけは押さえておく。

科学的といったのは、ほんらい賤民史とすべきものを部落史として、「広義の部落史、狭義の部落史」などと説明した「権力設定説」によりかかるそれを歴史学研究に据えなおした渡辺 広（執筆 藤本清二郎）。「部落問題解決過程の研究」を歴史研究としてリードした鈴木 良（執筆・谷 彌兵衛）。権力と癒着した解同が「逆流」に走った時、部落解放運動の真価を解明した「水平社運動の研究」を奈良県で共同研究を組織し研究と実践のモデルを提起した以後の鈴木の研究としての足取りは、見事というほかはない。

『水平社運動史の研究』（全6巻・71〜73年／部落問題研究所）を藤谷の指導のもとに推進したのは、馬原だった。日本資本主義と部落問題の關係に初めてメスを入れたのも、北原と中西の異例といっている著作集を提起し、纏めたのも馬原だった。

ここで大学部落研と地域部落研に言及しておく。東京におけるその経緯は「難波英夫・鈴木二郎と東京部落問題研究会」で成澤榮壽が書いている。60年代の高揚期に、全国の70大学で活躍した大学部落研と地域部落研はその「申し子」と言っている存在だった。例えば初めは重視しなかった解同に代わって、「冤罪事件」として狭山事件を闘ったのは国民救援会であり大学部落研であり地域部落研だった。それが解同の排外主義の中心的な闘争手段とされ、「差別裁判」と規定したそれに従わないものを排除し、暴力学生が解同に追従し運動を一層変質させた。つまり部落問題の解決過程を複雑にした要因は、協同の取り組みを否定して解同と「連帯」しないものを排除・攻撃するという「路線」にもあったことを再確認しておく。

そうしたなかで兵庫部落問題研究所の果たした役割は大きかった。八鹿高校事件への取り組みや、兵庫県を越えた全国での部落調査、そして月刊の機関誌や啓発冊子の発行。その経過は鳥飼慶陽「杉之原寿一と部落問題研究の総合的展開」に詳しい。とりわけ部落問題の現状分析で大きな役割を果たし、社会学をたたかいたの科学であるとした杉之原は調査と理論と同和事業終結時の現場指導は研究者として異彩をはなっている。私は、杉之原を部落問題を専攻した唯一の学者と言いまし、書きもしたが、今もその評価に変わりない。

面白いのは、そうした「激動」のなかで静かに進められた部落問題を扱った文芸作品の研究だ。この分野の研究は東京部落研から始まり、部落問題研究所が継承した。その中核が北川鉄夫（執筆・川端俊英）だった。

同和教育

同和教育は部落問題研究所を産婆役として53年に結成された、全国同和教育研究協議会（全同教）から戦後の本格的な歩みを始めた。戦前の融和教育・戦中の同和教育の後遺症のなか、憲法・教育基本法にもとづく戦後同和教育を提起・普及したのも機関紙『部落』や全国部落問題夏期講座にみる通り、研究所だった。

その課題は三つに要約することが出来る。第一は悲惨としか言いようがない部落の子どもたちの教育課題にどう応えていくか。中心課題は、長欠・不就学と非行の解消そして進路の保障と纏めることができる。第二は、その課題に対して教育実践をどう構築するか。中心は生活つづり方教育と生活指導、そして人権認識とりわけ部落問題の正しい理解だ。第三は、学校教育の民主的な発展の取り組みを通して、どう実現していくか。つまり民主教育と同和教育の関連性の整理と発展、とする事が出来る。

第一の課題では、部落解放運動や同和行政との関係。第二の課題では「部落対策教育」と呼んでいい、上からの同和教育との実践的対決。第三は古い教育観・教育実践を打破して国民教育創造の一翼を担うこと。これらが複雑に絡み合っている難しい課題と取り組む実践的研究だった。

研究所の70年の歩みのうち、40年は同和教育の分野が量・質ともに圧倒していた。それは機関誌をみても、全国部落問題夏期講座を分析しても歴然としている。月例研究会を継続したのも教育部会だけだったし、関連する刊行物も圧倒的に多い。

同和教育の追求も目的の一つに名古屋大学から神戸大学に移った小川太郎（執筆・梅田 修）を中心に、高校部落研の石田眞一、後に蛭川民主府政の教育長を務めた金子欣哉、八尾中問題の立役者の川内俊彦、大同教の村橋端など多彩だった。小川が亡くなったあとは、和歌山大学の西 滋勝（執筆・梅田 修）が教育部会を牽引した。

小川は同和教育の理論と実践の構築者として、現場指導に徹した研究者として、同和教育を日本教育学会に提

起した学者として忘れることは出来ない。水田精喜（執筆・尾川昌法）は福祉教員として長欠・不就学に取り組み、小・中の実践者として非行の現実には体当たりし、さらに教科書無償闘争の組織者だ。高校部落研を産み育てた石田眞一（執筆・中野 功）は新制の高校教育に新しい価値を創造した。

事態を急変させたのは、「朝田理論」つまり排外主義に走った解同と「連帯」した解放教育の登場だった。それがいかなるものであったかは、八鹿高校事件に歴然としている。それを論破したのが西だ。西は勤評闘争の意義を真先に『世界』に書いている。勤評闘争は国民的課題と部落問題解決を結合した闘いとして、責善教育の評価が争点になった。勤評闘争は本書のテーマで言えば、生きざまを生きぶりに翻身させた大闘争だった。西はそれに軸足をおいて、解放教育を理論的に論破し同和教育概念の整理者として大きな足跡を残した。実践者としては、文学読本『はぐるま』の編集者でありはぐるま研・同授研・どの子研を組織して（解放教育が荒らした現場の実践を）「はじめに子どもありき」をモットーに民主教育の内実を豊かにした佐古田好一（執筆・河瀬哲也）にしばった。

時代を映もの

中上健次は生きざまを形象して芥川賞をとった。住井すゑ（執筆・北条常久）は生きぶりを基調に大作を生み出した。だが解同の暴力・利権が新たな「生きざま」を生み出す。それをあぶりだしたのが、小倉タイムスの瀬川負太郎（執筆・植山光朗）だ。

北九州市の解同と行政が癒着した土地転がしの利権あきりは、目に余るものだった。毎日新聞（81年10月23日）は「それは地元紙『小倉タイムス』のスクープからはじまった。」と書き出しているが、瀬川は「全身の毛穴から血が吹き出す思いの歳月だった」と書く苦闘のなかでそれを追求してきた。毎日が続けて『寝耳に水』の新聞社は直ちに取材に入った」と涼しい顔をしているが、何を言うかそれは市民だれもが知っている事実だった。

解同が怖くて、書けなかったただけではないか。ところがいったんタブーが破られると、各紙もいつせいに特集やら連載やらでフィーバーした。世間は「昔皇軍いま解同」と揶揄したが、もうこれは「生きさま」「生きぶり」で論評する域を越えている。

思い出してほしい。八鹿高校事件で共産党の機関紙「赤旗」以外のNHKを初めとする全てのマスコミが一行も報じなかった、あの事実を。

56年の人権週間に「部落・三百万人の訴え」の連載で新聞社としての生きぶりを天下に示した大阪朝日は、解同と癒着する「朝田新聞」と揶揄される状態に墮落した。例えば東京朝日の高木正幸編集委員が「建設工事にたかる／同和団体・暴力団連合／大阪・京都に実態を見る」という紙面いっぱいを使った記事も、地元大阪朝日はボツにするというていたらくだった。

それは又、全国の同和行政関係者が「ドーン詣で」した、素晴らしい取り組みを報じなかったことにも現れている。

水平社の創立以来、全国的にみても、最も果敢に糾弾闘争をたたかい、戦後は、全国的にみても部落解放闘争を頑強に闘ってきたのは、そして和歌山県のトップをきって同和教育を推進してきたのは、この2百所帯の部落だった。だが、部落は解放されなかった。特別措置法がでたとき、こんどこそ、という必死の思いで決意したが、「差別される部落民の存在しない」町づくり・住民運動だった。それを担った「六人衆」を栗原 省が書いている。「生きさま」「生きぶり」の個人レベルではなく、それが集団としてとりくまれ見事な成果をあげている。だが大阪朝日はもち込まれても、「記事にしなかった」。

このように部落問題の解決過程は複雑な軌跡を描いている。にもかかわらず部落差別は不可逆的に解消の道をあゆんだ。それを担った人びとの生きぶりを通して記述したが、注意しなければならないのは、それは集団の力によって実現していることだ。ドーンの六人と町民が一体となって行使した請願権はそれをよく物語っている。それは集団のなかで実現し、集団として継承されていく。

同和教育の八尾中事件もそうだ。小川は近代日本の教育を「立身出世主義の教育」と喝破したが、戦後教育も打ち破れなかったそれに生徒集団が体当たりし、差別教育変革の狼煙（かっば）となった。「……おれら、静かに授業をうけることが常識だぐらいは分かっている。しかし、授業の内容は、おれらにはさっぱり分からへん。なんにも分からへんのに六時間もすわっているのは、ほんまにしんどいのやぞ、それは、おまえらには分からへんわ。」

敗戦時2千人だった西郡部落が61年の八尾中事件当時は、「独り者は釜が崎へ、所帯持ちは西郡へ」と6千名にまで膨張した日本社会の最底辺。その教育矛盾を部落問題が突き・突破した出来事でもあった。それを支え継承した教師集団を、その一員だった国広悦正が書いた。

最後は猿回しを復活させた村崎義正（執筆・東上高志）だ。松本治一郎から始めた「担った30人の生きぶり」を快男子で締めくくったわけだが、注意してほしいのは、30名の中に作家の住井のほかは女性が登場していないことだ。部落問題の解決過程を言うならば、日常における部落の女性の役割は大きい。にもかかわらず、指導者として登場していないところに、この国のもう一つの差別である婦人問題がある。

その日常をノンフィクション作家大塚茂樹が「中西ハルエと仲間たち」として40頁にわたって書いている。

（東上 高志）